平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｋ05	氏　名	島村　雄次郎
研究主題 ―副主題―	若手教員の授業力が向上する「場面設定型授業システム」を取り入れた教材開発 ―外国語活動の教科化に向けたＩＣＴ機器等の有効的な活用方法―		
所属校	小平市立小平第四小学校	派遣先	玉川大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	外国語活動は、2011 年４月から小学校第５・６学年で週１時間行われている。学習指導要領の目標には、外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う、と書いてある。しかし、副読本である「英語ノート」を経て、「Hi,friends！」の構成が、コミュニケーションの素地を養う構成には十分にはなっていないと考える。それは、「Hi,friends！」の構成がリスニング中心の構成のため、児童のアウトプットする授業場面が少ないという現状がある。 昨年度まで市内の外国語活動部に所属し、外国語活動の授業の研究を行ってきた。東京都内の６市（小平市、府中市、調布市、八王子市、多摩市、日野市）の外国語活動部でアンケートを取ってみると、外国語活動部員以外では、ＡＬＴに頼った授業が多い。文部科学省は、外国語活動は担任が主導で行うという原則を示しているが、ＡＬＴ主導の授業が多いという現状がある。 「Hi,friends！」通りに授業を行っても、リスニング中心の構成の上、児童が会話をする状況設定がほとんどないので、子供たちの発話量は増えない。つまり、最終的に必然性のあるコミュニケーション活動ができないのである。 また、2020 年の英語教科化を控えて、小学校外国語活動には問題点が幾つか見受けられる。第一にＡＬＴは必ずしも授業が上手なわけではない。第二に授業にはゲームが多く取り入れられているが、英語を「話す・聞く活動」がおろそかになっている。第三に「Hi, friends!」のコミュニケーション活動が、子供の日常に十分に即していない、必然性のある場面が欠如している、といった問題点が見られる。 以上の現状を踏まえて、子供が必然的に会話をしたくなる授業を開発し、誰もが、外国語活動の授業ができる教材を開発することが、本研究の主な目的である。
Ⅱ　研究の方法	私立小学校、公立小学校合わせて４校の現在の外国語活動の授業の分析と、文部科学省が出している「Hi,friends！」の分析を比較すると、子供たちがコミュニケーションをとる状況の設定が、子供の日常に十分には即していないので、児童が会話をする必然性がもてない。また、英語の授業の中でゲームが多く見られるが、高学年が行うには知的な内容が不十分なことがある。しかも、勝ち負けにこだわってしまい、英語を「話す・聞く」がおろそかになっている。現在学校で行われている外国語活動は、ＡＬＴに任せているところが多い。ＡＬＴは英語が上手であっても授業が上手いわけではない。英語を児童に理解させ得るためにゆっくりと話したり、黒板に文字を書いたりするが、コミュニケーションの素地を養うという目標から大きく離れていってしまうことが多い。 これらの授業からの反省点を踏まえて、本研究では、仮説と予想される結論「子供たちが話したくなる状況を設定し、そのために絵本やＩＣＴ機器を活用することで、子供の発話数が増え、コミュニケーションの量が増える」を実証するための授業の活動を明らかにしていく。 研究方法は、まず、児童が自ら話したくなる外国語活動の授業開発を行う。検証授業では、絵本を使ったクラスと絵本を使わずに「Hi,friends!」のみを使った授業、音声ペンを使ったクラスと使わなかったクラスでの児童の発話量、意味の理解状況を比較分析し、有効性を検証した。絵本・音声ペン共に使わなかったクラスには事後、絵本・音声ペンを使用した授業を実施した。

	①絵本（Oxford Reading Tree）を導入に使い、状況設定と、国際理解の観点を重視した授業開発 ②電子黒板に対応する授業の開発　絵本３冊分（①Trainers　②The Toys’ Party　③A New Dog） ③音声ペンを活用した一斉授業の開発　（旺文社　Happy Planet）
Ⅲ　研究の結果	今回の検証授業は、二回に分けて行った。一回目の絵本を活用した検証授業では、導入で毎時間同じ絵本を読み聞かせることで、児童が習得する表現の意味を理解する手助けになることが分かった。また、絵本を読み聞かせていく中で、教員と子供がインストラクションを取ることで、自然と子供たちに語彙力を付けることができた。絵本の中にはイギリスの一般家庭の文化が背景にちりばめられているので、自分の日常生活の目線で日本とイギリスとの文化の比較をし、国際理解にもつながることが分かった。 毎時間同じ絵本を読むと児童が飽きてしまうと思っていたが、授業の３日目に「あ、同じ本を読んでいる」と気付く子供もいたので、一定期間同じ絵本を読み聞かせることも大切である。絵本は同じ表現を繰り返して使っているので、何回か読んでいるうちに次に出てくるフレーズを予想し、言うことができるようになる。このフレーズを習得するダイアローグと関連付けると、児童が自分から話したくなる、必然性が生まれてくる。 第二回目の音声ペンを活用した検証授業では、使用した教具である音声ペンが、説明がほとんどいらないシンプルな作りなので、音声ペンの使用目的である、ネイティブの発音を好きな場面を好きなだけ繰り返して聞き、練習することが可能になった。 「先生が何人もいないので、音声ペンはとってもいい」という児童のアンケートにもあるように、教員が発音以外の指導に時間を取ることができる画期的な教材である。 表現の発音に自信をもつことができたら、ジェスチャーや道具の使い方への工夫へと児童の視点が向き、発表の幅が大きく広がることも分かった。自分が話したいことを、ジェスチャーを含めて自信をもって発表するというのもコミュニケーション力の一つであり、これが日常生活の中での、本来のコミュニケーションにつなげる可能性あることが分かった。 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックではたくさんの外国人が日本を訪れる。そのコミュニケーションツールの多くは英語である。外国から来たお客さんにおもてなしをすることを視野に入れ、自信をもって英語でコミュニケーションができる子供たちを育てていかなければならない。そのために更に学習効果が高く、楽しい授業の開発が必要である。
Ⅳ　考察	今回の検証授業では、「Hi,friends!」に対応した授業の開発が 17 レッスン中４レッスン分しか作ることができなかった。 「Hi,friends！」の分析表からも分かるように、Oxford Reading Tree の Stage２の６冊で、今回開発したインタラクション活動を含めれば、全てのレッスンを網羅することができる。 若手教員を含め、英語に苦手意識のある教員がストレスなく英語の授業ができるように、絵本を活用した場面設定型の授業のラインナップが必要になる。また、他の教員が授業を行い、効果がどの程度あったかという検証ができていないので、その検証も今後の課題である。 音声ペンを活用した授業に関しては、今回は既成の教材から抜粋した形での教材化だったので、こちらも例えば、Oxford Reading Tree の Stage６を音声ペン対応の教材化し、「Hi,friends！」の分析表に対応した授業開発が必要だと考える。 そのための１レッスン４時間程度の授業を指導案と教材のセットでパッケージ化して、年間カリキュラムを作成することが今後の課題である。